

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

- 巻頭エッセイ「大阪の公立高校入試、今・昔・・・」..... 1
- 2014 年度「教員免許状更新講習 1・2」報告..... 2
 - 講習 1：言語文化としての英語表現（英語の発想と日本語の発想）..2
 - 講習 2：授業指導技術スキルアップ演習（発音・リーディング・文法）...3
- 授業デザインスキルアップ演習報告..... 3
- 授業の玉手箱 京畿英語村バジュキャンにて..... 4
- 書籍紹介『新しい英語科授業の実践 - グローバル時代の人材育成をめざして』..4
- 編集後記 / 第 32・33 回勉強会案内..... 4

巻頭エッセイ

大阪の公立高校入試、今・昔・・・

中垣 芳隆

大学を卒業して大阪府の公立高等学校の教員となり、教育行政に転じるまでの間、長らく教壇に立っていましたが、教員という仕事の嬉しいことの一つは、かつての教え子たちが同窓会に招いてくれることです。

教え子たちの成長した姿を見て時の経過の速さを感じるとともに、思い出話に花を咲かせては遠い昔にタイムスリップする。この一時は何物にもかえがたいものです。

この夏も、子育て最中の 40 代の教え子たちからお誘いがあり楽しい時間を過ごさせてもらいましたが、彼、彼女たちの関心の一つは高校入試。

「先生、大阪府の公立高校の入試よく変わりますね。学区はなくなつたし、入試の回数も下の子が受けるときは一回だけになるみたい。」と、特に答えや対応策を求められたわけではなかったのですが、かつてはその一端を担っていた業務であることから帰宅後に新聞記事を探してみました。

7月17日の産経新聞には、大阪府教委は、前期（2月）と後期（3月）の2回に分けて実施している大阪府内の公立高校入試を原則として3月に一本化する方針を固めた。8月の教育委員会議で議論し、正式決定すれば、現在の中学2年生が受験する平成28年度入試から実施する・・・とあります。

原則として一本化ということは、2月には体育、芸能文化、音楽科などの5科を、大宗を占める普通科をはじめとしてそれ以外の学科は3月に入試が行われるようですが、一見したところ大阪の入試制度は4半世紀前の姿にほぼ回帰するよう思えます。

自身の整理もかねて、大阪府における受験機会の複数化の歴史を振り返ってみますと、平成3年以前は3月の一般入試ですべての学科の入試が行われていましたが、国における高校入試の改善等の動きを受け、大阪府においても2月に専門学科第一次入学者選抜という名称で複数入試が導入されました。実施対象学科は普通科指向の影響を受けていた工業、商業などの職業に関する学科の活性化と国際教養科をはじめとして当時次々と誕生した専門学科へのチャレンジの機会確保を目的に、募集人員の30%を定員として、学科の特色に応じて、学力検査における教科の配点や調査書における評定の取り扱いに傾斜を設けたり、実技検査が実施されました。

その後、平成15年度から専門学科を前期、普通科を後期に振り分ける形で前後期制が採用され、一定の定着をみたようです。しかしな

がら、その後の外部環境の変化、仄聞するところでは私学の授業料無償化の拡大や、公私の受入れ比率の廃止の結果、平成23年度の入試結果において、一部の学校に志願者が集まる一方で、志願倍率が低迷する学校が現れるという、いわゆる二極化の傾向が顕著になりました。この状況に対する当面の対応策として、平成25年度入試から普通科においても前期募集を開始するという経緯を辿ったようです。

複数化導入当初から、受験生に複数の受験機会を提供し、実施学科の活性化という所期の目的と相反する形で中学校及び高等学校の教育活動に与える次の課題が提起されていました。

高等学校においては、2月から3月にかけては3年生の大学入試、前期と後期の間に1年生、2年生の学年末試験がある。その中で採点作業のみならず実質負担の増大。

中学校においては、2度の選抜を実施することによる在校生指導（進路指導等）の時間不足。クラスの中に進学先が決まった生徒と最後まで受験する生徒が混在し、進学先の決まった生徒が多い場合、後期入試を受験する生徒のモチベーションを切らさずに授業することに伴う困難さ。

また、現行の前期入試では学力検査は国・数・英の3教科に絞られていますが、ややもすると地理・歴史・公民や、理科学的な思考力という一般的な教養を身につけることがおろそかになるのではないかと懸念も指摘されていました。

先ほど引用した新聞記事には、ほとんどの学科の入試を3月に一本化すれば志望校挑戦の機会を減らす側面もあり、府教委内でも慎重な声がある、と結ばれていますが、行政の通常的手法として、ここまで具体的に報道された事柄が振り出しに戻るということはまず無いと思われれます。

今後、多方面からの意見を聴取され11月の教育委員会議において議決の運びとなると思われれますが、昔から入学者選抜にベストはないが、受験生にわかりやすいシステムであることが肝要と言われます。

今回の改善案が了とされれば、暦年の課題と、複雑化した入試形態の解消につながるものであり、歓迎すべき方向と考えています。

ただ、受験する生徒及び保護者の立場からすれば入試制度の変更は将来を左右する大事であることから、混乱を生じることのないよう、くれぐれも十分な周知期間を担保されることを願うものです。

教員免許状更新講習 2014

報告：中井 弘一

特集

講習1：言語文化としての英語表現 -英語の発想・日本語の発想と生き生きとした英語表現活動-
 講習2：授業指導技術スキルアップ演習：発音・音読指導、リーディング指導、文法表現指導

講習1 8月5日(火)

担当：東條加寿子、中井弘一

■講座のねらい

第一部では、国際社会の様々な場面をとらえ、メディアを介して私たちが接することのできるいわゆる「生の英語表現」を取り上げる。そこでは、どのような英語表現が使われているのか、どのような情報やメッセージを伝えようとしているのか、そして背景にどのような文化や発想の違いがあるのかを考え、言語と文化の関係性や言葉の力を理解するとともに、「生の英語表現」を学ぶ喜びを引き出すヒントにしたい。

第二部では、「英語という言語を知る」を基調テーマに、「発音・音読による英語表現」、「日英感覚の違いから起こる英語表現の味わい」、「英語で表現する楽しみ・創作表現活動」など英語教室での実際の活動を取り上げ、ワークショップ形式を通して「英語表現」という言語文化を体感しながら、明日の授業を展開するための基盤構想力の育成に努める。

●文部科学省提出報告・受講者評価結果 (48名受講：4段階評価)

- 4：よい(十分満足した。十分成果を得られた)
- 3：だいたいよい(満足した・成果を得られた)
- 2：あまり十分でない(あまり満足しなかった・成果を得られなかった)
- 1：不十分(満足しなかった・成果を得られなかった)

①本講習の内容・方法についての総合的な評価

平均値：3.90 (評価4：43人、評価3：5人、評価2・1：なし)

②本講習を受講しあなたの最新の知識・技能の修得の成果についての総合的な評価

平均値：3.79 (評価4：38人、評価3：10人、評価2・1：なし)

③本講習の運営面についての評価

平均値：3.85 (評価4：41人、評価3：7人、評価2・1：なし)

受講者のコメント(受講者48名から一部紹介)

- ・お二人の先生とも、今回の講習に大変興味深く豊富な資料を準備され、とても良い勉強になりました。「生の英語」では authentic な内容を生徒に提示し、そこから学べる文化の違いを生徒に理解させる様々な事例を紹介していただき、とても有益でした。「生き生きとした英語表現活動」では、多角的に生きた英語を生徒に表現させる活動例を提示していただき、大変勉強になりました。現場でも活かしていきたいです。これからの残りの夏休みに講習で消化しきれなかった部分をしっかり復習しようと思いました。
- ・「言語を学ぶとは文化を学ぶことである」ということがよくわかり、これからの指導に非常に役立つと思いました。また知らない語法等も教えていただきよかったです。何よりも非常にバラエティに富み、生徒の意欲を引き出そうとする教材を数多く与えていただきありがたかったです。
- ・第一部・第二部のどちらの講習とも、日頃私が知りたいと思っていること、どうしようかと悩んでいること、そのニーズに合った講習でした。第一部の講習では普段あまり意識していない言語と文化の関係性を学べ、またその理論を教えていただいた。準備していただいた教材も、それぞれ個性的で自分でも使ってみようと思った。第二部の講習では、明日から早速やってみようと思うような、具体的・実践的な授業の展開法をお教いただき、生徒になった気分でした。教師としてやってみようというイメージができた講習であった。先生方、大変な準備をしてくださり、ありがとうございました。
- ・「伝えたいものがあるから」から「表現する」ということに一番感銘を受けました。そのシチュエーションづくりから入ることの大切さを改めて知れてよかったです。「はらぺこあおむし」「マラサンの話」はぜひ授業に取り入れたいです。中井先生からいただいたアイデアの一つ一つ、教材化していく姿勢を大切にしていきたいと思いました。ありがとうございました。

を改めて知れてよかったです。「はらぺこあおむし」「マラサンの話」はぜひ授業に取り入れたいです。中井先生からいただいたアイデアの一つ一つ、教材化していく姿勢を大切にしていきたいと思いました。ありがとうございました。

- ・第一部・第二部の二つのテーマで一番心に残ったのは、「違いを知ること楽しい」ということです。英語学習を通して、自分の考えと異なる考えを知ることとはとても大切で、楽しいことだと改めて思いました。その部分をいかに楽しく、興味を持たせるかについては私の指導の力量をもっと養う必要がありますが、何より、私がおもしろい事を知っている事がとても大切なことだと思います。その楽しさを知ることができたこの講習は、教員としての大きな step up になりました。ありがとうございました。
- ・東條先生の「英語教育を少し離れたところから俯瞰して見る」視点でのお話は、研究者ならではの内容で、大変参考になりました。特に、「Where the Wild Things Are」はこどもに怒り方を教えるようというご意見には深く同意し、すごいなあと思いました。先生は英語を教えることそのものも大変お好きなのだと想像します。中井先生のお話は、とても時間内では収まらず、一週間くらいじっくり連続で講義を受けることが可能ならどんなに素晴らしいだろうと、何度も思いました。頂いた資料はどれもすごく時間をかけ、愛情を込めて作成されたことが、日々教材研究に頭を悩ませている私たちにはずぐにわかります。貴重なご講義どうもありがとうございました。
- ・本日はとても有意義な一日を過ごす事ができました。どの講習も授業で活用できそうなものであり、また何よりも東條先生、中井先生のお話がおもしろくてあつという間の一日でした。ワークアウトをしてみると、生徒には「何でもいから言ってみて、やってみて」と言うものの、自分が逆の立場だと急に思い浮かばないものだと思います。私も大学の頃に中井先生のような先生に出会っていたら、もっとちゃんと授業を聞きたらと思うほど、楽しい講習でした。ありがとうございました。
- ・講師の先生方も、たくさんの資料を用意してくださり、「盛りだくさん、時間がない」とおっしゃっていましたが、本当に時間が短くもつとつと思っているうちに終了となってしまいました。今日一日しか受講できないのが残念です。提示していただいた資料も早速、try してみたいと思うものばかりですが、受講者を前に講義される東條先生、中井先生のテンポ、間の取り方や合間に挟まれる小話の入れ方なども非常に参考になりました。来年も受講したいと思います。ありがとうございました。
- ・期待通りの内容でした。心へも脳へも刺激をもらい、私自身が元気になれたのとこれからの授業のためのヒントをたくさん頂きました。高校時代、英語のおもしろさを教えてもらおうとわくわくしていた自分を改めて思い出し、今の自分を反省せねば!と思った次第です。

講習2 8月6日(水)

担当：夫 明美、東條加寿子、中井弘一

■講座のねらい

第一部「発音・音読指導」では、英語の発音を理解し発音指導の素地を教師自身が形成するために、音素の生成過程や音のつながりの仕組みを理解し、教室で使用されているテキスト・絵本などを用いた体験型ワークショップを通して、発音向上のための練習を行う。また、音読指導のヒントについて考える。

第二部「リスニングとリーディング指導の接点を考える」では音と文字をつなぐ演習として、リスニング(音声情報)とリーディング(文字情報)を関連付けたスラッシュリーディングの指導法について考える。

第三部「文法表現指導」では、「文法や英語の使い方がわかりやすい授業」を求める生徒のニーズに応え、英語を使ったり表現し合ったりするための「わかる」「使えるようになる」文法指導のステップを中学校や高等学校での指導例をもとに考える。

●文部科学省提出報告・受講者評価結果 (49名受講：4段階評価)



①本講習の内容・方法についての総合的な評価

平均値：3.84（評価4：41人、評価3：8人、評価2・1：なし）

②本講習を受講しあなたの最新の知識・技能の修得の成果についての総合的な評価

平均値：3.90（評価4：44人、評価3：5人、評価2・1：なし）

③本講習の運営面についての評価

平均値：3.88（評価4：43人、評価3：6人、評価2・1：なし）

受講者のコメント（受講者 49 名から一部紹介）

- ・「発音指導」に関しては、初めて教わるのが多く、何となくやっていたことが、「L.E.A」ルールのおかげで明確になりました。「リーディング」に関しては、日頃からスラッシュリーディングを行っているのですが、やり方は間違っていないんだと安心するとともに改めてその方法が持つ重みを、体験を通して感じることができました。「文法指導」に関しては、いろんな切り口から英語を見ることによって、凝り固まった授業スタイルに良い刺激を与えてくれました。2学期から実行してみます。ありがとうございました。
- ・2日間参加させていただいたのですが、どの先生のお話も興味深くまた受けたいと感じました。本当に実りが多く、充実した2日間になりました。中井先生の文法指導のお話を聞いて、目からウロコでした。今まで子どもたちに「なんでそうなるん？」と訊かれても、「これが英語の決まりや」という言葉で逃げていた自分が恥ずかしくなりました。先生の話を聞いて、私自身も「なるほど！！」とすぐ納得できましたし、自分の中の「何で？」も解決でき、改めて文法の奥深さが知れたように思います。そして文法っておもしろいなと思えました。私も子どもたちの「何で？」にちゃんと答えられる先生になるようもっと勉強しようと思いました。
- ・夫先生の音読指導は、知っていた内容と恥ずかしながら初めての内容もあり、今後の授業で取り上げてみたいと思いました。東條先生のリスニングとリーディングの講座もチャンクの捉え方がおもしろく、やはりおもしろいと思えるように指導していきたいです。中井先生はいつもながら、大変な資料をいただき、準備に時間をかけておられることに頭が下がりました。教師がどれだけ準備をするかは、その授業がどれだけ成功するかに関わってくると思います。
- ・発音の法則は難しいと感じましたが、音勢や音のまとまり、ポーズをとることなど…日頃何気なく発音していたことが頭に整理される感じでおもしろかったです。スラッシュリーディングで情報のまとまりを読み取ることや、聞き手の7±2を体感したりと、とても勉強になりました。文法指導については、①指導の流れという点、②文法事項の説明の仕方という点で、もっともっと聞きたいと思う内容でした。何より、大阪女学院の先生方の熱意と知識のすごさ、そして素敵なお人柄に触れ、充実した2日間となったこと、とても感謝しています。ありがとうございました。
- ・「発音・音読」については、知っていることも多く、もう少し体験・演習の時間があると良い。「リーディング」については、最後の一番訊きたかった部分の時間がなくなり残念だった。スラッシュリーディングの重要性が分かり、とても有意義であった。「文法指導」については、これまであまり差異を指導してこなかった will と be going to などの違いなど具体的な指導方法も含めて教えていただき、「目からウロコ」のお話が多く、受講してよかったと思います。2学期からの意欲に繋がる講座ばかりでよかったです。
- ・午前中の夫先生の講義は大変参考になりました。自分が今まで経験的に修得して教えてきたことが間違いではなかったことが、理論的に裏付けられた気がしました。中学生にはすべてをマスターさせるのは難しいと思いますが、高校進学後の基礎となるべきことは指導していこうと思います。午後の東條先生の講義ではスラッシュリスニングという自分には新しい方法を教えていただき、スラッシュリーディングとセットで教えられたらと思います。中井先生のお話は、今日も時間が足りず、もっと時間を取っていただけてお聞きしたかったです。
- ・音声学における様々な知識が学べて良かった。特に、let it go TOYOTA の [t] → [d] の現象は理論が分かって非常に興味深かった。リスニングは、リプロダクション、サイトラが良かった。文法の講義をもっとじっくり聞きたかった。文法の説明はとても興味深かった。



大阪女学院大学授業デザインスキルアップ演習・現職教員支援講習

2014年8月8日(金) 9:30 -16:40

“効果的なプレゼンテーションを行うために”

午前：“プレゼンテーションを効果的に行うための方略”

午後：“Presentation 課題1 教科書をプレゼンする実習1”

“Presentation 課題2 日本紹介「近未来地球地図」実習2”

参加者：現職教員：16名

担当：中井弘一

参加教員コメント（一部紹介）

- ・毎回のことながら、中井先生の熱い思いを沢山いただいた講習会でした。今回は課題があり、かなり悩みながら作りましたが、大変勉強になりました。自分の作品を作る上で、自分と対峙する時間を持てたことはとても良かったです。そして、同じ課題でも人によってはアプローチの仕方が違って、別の視点から見ると楽しさをいただきました。現在高校3年生の授業でプレゼンを取り入れていますので、本日学んだことを活かして参りたいと思います。本当にありがとうございました。
- ・午前中は、大変豊富な資料をベースに分かりやすく説明していただきました。普段あまり気にせず作っている資料やワークシートですが、今日の研修で学んだことを活かしていきたいと思っています。午後は各先生によるプレゼンテーションを行いました。プレゼン自体の感想やフィードバックを受ける時間があると一層良かったのですが、分野別に参加者の皆さんの工夫にとんだアイデアを拝見させていただきました。今後の content-based を意識した授業にも繋がるかと確信しています。いただいた先生方の電子データ、じっくり見直したいと思っています。ありがとうございます。
- ・毎回、満足度 200% の講義内容、これについては今更言うまでもありません。今回の醍醐味は、やはり、同じ教材で参加者が課題を準備し、それを見ることができたことでした。他の人たちのプレゼンの作り方、構成の仕方、まとめ方、本当に勉強になりました。中井先生からの、度重なる催促メールに怯えながら、「あ、5日の締め切りが延びた…」とほっとしたりの今週でした。メールで書いてくださったように、「自分で作成する癖を付けなければなりません」の言葉、身に沁みました。と同時に、日頃からテーマを決めてまとめるようにしていきたいと本当に思いました。日々の授業では、準備にそんなに時間が取れる訳ではないので、2学期以降に向けて、どんな風に準備をしていこうかという作戦に、すごいいいヒントを沢山いただきました。今日はありがとうございました。
- ・中井先生には大変ご迷惑をおかけ致しましたが、同じ教材をどのようにプレゼン（シチュエーション別に）するのかというのが、人によってだいぶ違い、大変おもしろく勉強になりました。また、他の先生方の教材の捉え方など、こういった見方があったのか？と思うこともあり興味深かったです。課題があったことで、確かに中井先生にご迷惑をおかけするほど、仕事に追われていた中での参加で、一瞬、欠席？がよぎりましたが、作品としては恥をかくことによって中井先生はもちろんのこと、他の参加者の先生方から多くの学びがありました。中井先生の講義を踏まえて、やはり生徒にも「良いプレゼンとは？」の講義が必要だと思いました。本当にありがとうございました。今後とも、ご指導のほどよろしくお願います。課題が一つだと参加者が増えるのではと思います。



授業の玉手箱

書籍紹介

京畿英語村パジュキャンブにて

東條 加寿子

9月、韓国の英語教育の現状を視察するために、学生と京畿英語村パジュキャンブ（以下、パジュ英語村とする）を訪ねた。すでによく知られているように、韓国では英語教育推進の担い手として2004年以来英語村が建設され、現在韓国内に約30の英語村がある。ほとんどの英語村の経営が半官半民、または民間に委ねられている中で、パジュ英語村は唯一、地方自治体（京畿道）によって運営されている。英語村のスタッフはすべて京畿道の公務員で、着任して数年目の現副理事長は道内で以前副市長を務めていた方とのことである。このため、パジュ英語村の運営は道内の教育行政と直結しており、道内の公立中学校の英語カリキュラムと直接的に関連づけられている。公立中学校の生徒は英語村研修を受けることが義務づけられており、私たちが訪問した際には、4泊5日の日程で中学2年生約300人が来ていて、敷地内は活気に満ちていた。生徒達は、寮に滞在し、カフェテリアで食事をし、英語漬けの5日間を送る。（写真参照）

英語村は、生徒達にとってヴァーチャルな英語の世界である。正面入り口には、空港の入管さながらのゲートが設けられており、ここからはすべて英語。ゲートをくぐると英語の標識で示された街並みが広がる。そこでは、アメリカ、カナダ、南アフリカなど世界中から集まった英語ネイティブの先生たちが授業からエンタテイメントまでオールイングリッシュで対応する。英語を使った活動はゲームやドラマ、料理等バラエティに富み、病院や警察、旅行社といったヴァーチャルな施設での学習が英語を使った体験をリアルなものにしている。

パジュ英語村ではこういった中学生向けのプログラムの他に、大学生のための英語プログラムや英語教員のための研修も実施されており、これらのプログラムでは日本や中国といったアジア地域のみならず、ロシアからの参加もあるようだ。

なぜこのような施設がつけられたのか。ここでどのような英語教育を目指しているのか。5日間パジュ英語村に滞在して次のように感じた。

まず一つ目の特徴は、韓国にいながらにして英語の世界に浸ることのできる環境の創出である。日本では、「英語の授業は英語で」の取組みが進められているところであるが、韓国でもTETE (Teaching English through English) の取組みは早くから推進されている。しかし、韓国における英語村建設はその教室の枠を飛び出して「英語に浸る環境 (Immersion Environment)」を創りだし、その環境のなかで生徒達に体験的に英語を使う機会を与えようとしている。二つ目に、多文化環境 (multicultural environment) の追求である。このことは、異なる文化背景を持つネイティブ教員の雇用や海外からのプログラム参加者誘致によって英語村内に「多文化」を物理的に投入することによって実現されており、その環境の中で生徒達が多文化的体験をすることが可能になっている。これらの背景には、いうまでもなく韓国の学歴社会や留学熱があるが、英語教育推進の観点に絞って捉えても日本との間に発想の違いがあつて興味深い。日本から英語研修・留学のために英語圏ではなく韓国英語村へ、との需要もあると聞く。隣国の英語教育事情に大いに考えさせられた。



『新しい英語科授業の実践 - グローバル時代の人材育成をめざして』
石田雅近・小泉仁・古家貴雄 (著) 金星堂 2013年 3,240円
312ページ

本書のまえがきによると、想定される読者は「英語科教育関係科目の担当者をはじめとして、英語科教職履修生、新任英語教員、小学校外国語（英語）活動担当教員」である。内容は三部より構成されており、各章が15ページ前後でコンパクトかつ分かりやすくまとめられている。

第一部の実践・展開編では、小・中・高で英語にかかわる教員の英語授業力の向上と強化にフォーカスして、各学校レベルの授業で注意すべきこと、授業の組み立てについても具体的な事例とともに詳細に説明されている。学習指導要領との連携を意識しながら授業を計画し実行していくヒントを多く含んでいる。

第二部の理論・指標編では、英語教育の理論を振り返り、それを基盤として実際の授業実践へどのようにつなげるか、学習指導要領との連携を意識しながら運営していくヒントを多く含んでいる。また、諸外国における小学校英語教育についても詳細なデータとともに紹介されており、「待ったなし」の状況で「小学校英語活動」に取り組む現場の教員、小学校英語教員志望の学生にも参考になると思われる。

最後の第三部、応用・発展編では、音声、文法、語彙指導について言語活動の例を含んでおり、特に、教育実習へ臨もうとする教員志望学生にとって有益であると思われる。実際に授業を運営していくうえでは授業の改善は欠かせないものであるが、その際に注意すべきこともチェックリストを使用しながら端的に述べられている。

本書の一番のフォーカスは終章の「成長し続ける英語教師をめざして」という表現に集約されているように思うが、その姿勢を育成、維持するためにも頼りになる一冊であろう。

(夫 明美)

編集後記 / 第32・33回勉強会案内

グローバル化には独立というアイデンティティも反作用として働くのだろうか。スコットランドの独立住民投票が9月18日に行われた。結果は、Scotland voted against ending its 307-year-old union with England and Wales, with the Scottish National party conceding defeat in the historic referendum. "The Better Together" ということなのだろう。ただ、このような重大なことを、16歳以上の有権者が民主的な自己判断で決めたことには歴史的な意味があるだろう。

*** 第32回勉強会「英語の教え方教室」 ***

2014 (平成26年)10月18日 (土) 14:00 ~ 17:00

「私の授業実践—英語を通じて世界を知ることをめざして」

滋賀県立米原高等学校の堀尾美央先生から、「英語を通じて世界を知ること」を、教科書外のことなどを授業で取り込んだりして、英語に興味を持たせる工夫や活動を紹介していただく。

*** 第33回勉強会「英語の教え方教室」 ***

2014 (平成26年)11月22日 (土) 14:00 ~ 17:00

「エクセター大学での研修で学んだこと」

奈良県立高取国際高等学校の松川慈先生に英国エクセター大学での研修報告をしていただき、英語授業での実践的な指導力の向上について話し合う。



大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher Development Support Centre

540-0004 大阪市中央区玉造2丁目26番54号

Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>

e-mail: ttc@wilmina.ac.jp